

高校生の介護意識に関する研究

一 一般高校生と介護を学ぶ高校生の意識の比較から 一

青柳 育子

(仙台白百合女子大学)

【要旨】

本稿では、普通科に学ぶ一般高校生と介護福祉科で介護を学ぶ高校生を対象に介護意識を調査し比較した。介護福祉科の高校生は、一般高校のカリキュラムの他に多くの介護専門科目を学び、その他福祉施設等で実習している。

アンケートの結果、「介護」について介護福祉科の高校生の方がポジティブに考え、普通科の高校生の方がネガティブに考えていた。また、身近に要介護者がいる高校生の方が、身体的及び経済的に負担がある事を理解したうえで、「介護」は当然と思う者が多かった。介護を学び、体験している高校生の方が「介護」をポジティブに考えている。今後、誰にも訪れる「介護」に対して、ポジティブに考えられるために、「介護」を学び、体験できる機会を設けることは意味あるものと考えられる。

1. はじめに

(1)研究の目的

わが国の高齢化は、終戦直後に出生した団塊の世代の高齢者入りと、国のさまざまな対策にも関わらず出生率の上昇が見込まれない現状ではまだまだ進むと予測されている。2008年の高齢者数は2700万人を超え、人口に占める割合は22.1%となり、5人に1人以上が高齢者の社会となった¹⁾。発表によると、2009年7月の時点での要支援・要介護と認定されているものは約475万人とされている²⁾。団塊の世代が高齢者となりきる2015年までには高齢者数が約500万人増となることから、要支援・要介護者になる者はもっと増加するだろう。また、核家族化が進み、高齢者単独世帯及び高齢者夫婦世帯が増加し、多くの世帯が家族介護が困難な状況では、「介護問題」は、今後誰もがかかえる生活の重要課題になるだろう³⁾。

このような現状で、今後自分自身にも訪れる「介護問題」に対して若者はどのような意識を持っているだろうか。10代も含んだ内閣府の国民生活選好度調査によると、老後に明るい見通しを持っていると答えたものは13%である。特に10代男女と70代女性が明るいと答えたものが前回調査より大きく減少した⁴⁾。また、「10の福祉領域（医療と保健、教育と文化、勤労生活、休暇と余暇生活、収入と消費生活、生活環境、安全と個人の保護、家族、地域生活、公正と生活保障）についての政策優先度」の期待では、全年齢層で「医療と保健」を望むものが一番多かった。10項目には「介護」が含まれないので「医療と保健」が一番多くなったと考えられる。老後の生活に不安を持つものが多く、安心を得るために「医療と保健」に対する政策を望むのだろう。

2008年実施の青森県で行った青少年の意識調査では、介護について、中学生では71.5%が年老いた親の世話をするのは当然と答えており、高校生は69.9%であった。また、男の人も女の人と同じように、家事や育児や介護をするのは当然と考える中学生は73.4%で、高校生は77.8%である⁵⁾。この調査では、多くの青少年は家事や育児、介護などの役割についてポジティブに考えていた。

青森県の調査は青少年に対するものであったが、これまで行われていた介護の意識調査の多くは、成人期以降の介護者や要介護者、又は介護職の調査であり、特に高校生を対象にした意識調査で発表されたものは少ない⁶⁾。

本調査では、B介護職養成高校の協力を得て、介護福祉科（以下、介護科）の高校生の意識調査を実施することができた。また、同時期に以前に調査協力のあった一般高校での調査も実施できた。この学びの異なる高校生の介護意識を比較して、若い時期に行う介護学習の意義について明らかにしたいと考えた。

(2)研究方法

調査対象：A普通科高校の高校生1～2年で家庭科受講生徒113名。介護職養成コースのあるB高校の介護科1～3年の高校生132名。

有効回答：普通科の高校生111（98.2%）、介護科の高校生129（97.7%）。

調査年月日：2009年7月6日～18日

調査方法：授業の中で、科目担当教員がアンケートの趣旨と方法を説明して自記式質問票を配布して回収した。無記名とし、個人が特定されないことや無記入により不利益がないことを説明し実施した。

調査内容：学年と性別、要介護者が身内にいるかの有無、祖父母と同居の有無など高校生自身の事と、介護の意識20項目に5件法（5＝非常にそう思う、4＝そう思う、3＝どちらともいえない、2＝あまりそう思わない、1＝まったくそう思わない）で回答を求めた。また、自由記述欄を設けた。なお、介護の意識20項目は、先行研究⁷⁾を参考に高校生向きにいくつか追加した。肯定的の思いである「親孝行だと思ふ」、「義務だと思ふ」、「頑張ろうと思ふ」、「自分の役割だと思ふ」、「よい経験になると思ふ」、「人間的に成長すると思ふ」、「恩返しだと思ふ」、「当然だと思ふ」、「最後まで見てあげたいと思ふ」の9項目をポジティブ項目とし、否定的な思いの「迷惑だと思ふ」、「疲れると思ふ」、「仕方ないと思ふ」、「手間がかかると思ふ」、「お金がかかると思ふ」、「どうして自分がやらなければならないかと思ふ」、「面倒だと思ふ」、「施設で世話して欲しいと思ふ」の8項目をネガティブ項目とした。「無我夢中になると思ふ」、「覚悟しなければならぬと思ふ」、「自分にできるか心配に思ふ」の3項目をどちらにも属さないものとした。

集計分析：統計ソフトSPSS11.5Jfor Windowsによる単純集計と、5件法による介護意識の平均値の比較にT検定を用いた。

2. 研究結果および考察

(1) 回答者の属性

有効回答者は 240 名で、内訳は第 1 表の①～⑤のとおりである。普通科と介護科の生徒数はほぼ同じ位であるが、女子は男子の約 2 倍である。学年では、1 年生が一番多く、1 年生と 2 年生で約 8 割である。祖父母と同居者は同居していない者の約 3 分の 1 であり、身内に要介護者がいる者はいない者の約 4 分の 1 であった。5 人に 1 人は身内に要介護者がいて、介護を目にするか話を聞く機会があるものと考えられる。

第 1 表 1-① 高校別生徒数

学校	生徒数	%
普通科	111	46.2
介護科	129	53.7
合計	240	100.0

1-② 性別

性	生徒数	%
男子	82	34.2
女子	158	65.8
合計	240	100.0

1-③ 学年

学年	生徒数	%
1年	97	40.4
2年	92	38.3
3年	51	21.3
合計	240	100.0

1-④ 祖父母と同居の有無

同居	生徒数	%
有	66	27.5
無	174	72.5
合計	240	100.0

1-⑤ 身内に要介護者の有無

身内要介護	生徒数	%
有	46	19.2
無	194	80.8
合計	240	100.0

1-⑥ 高校別身内に要介護有無とのクロス表

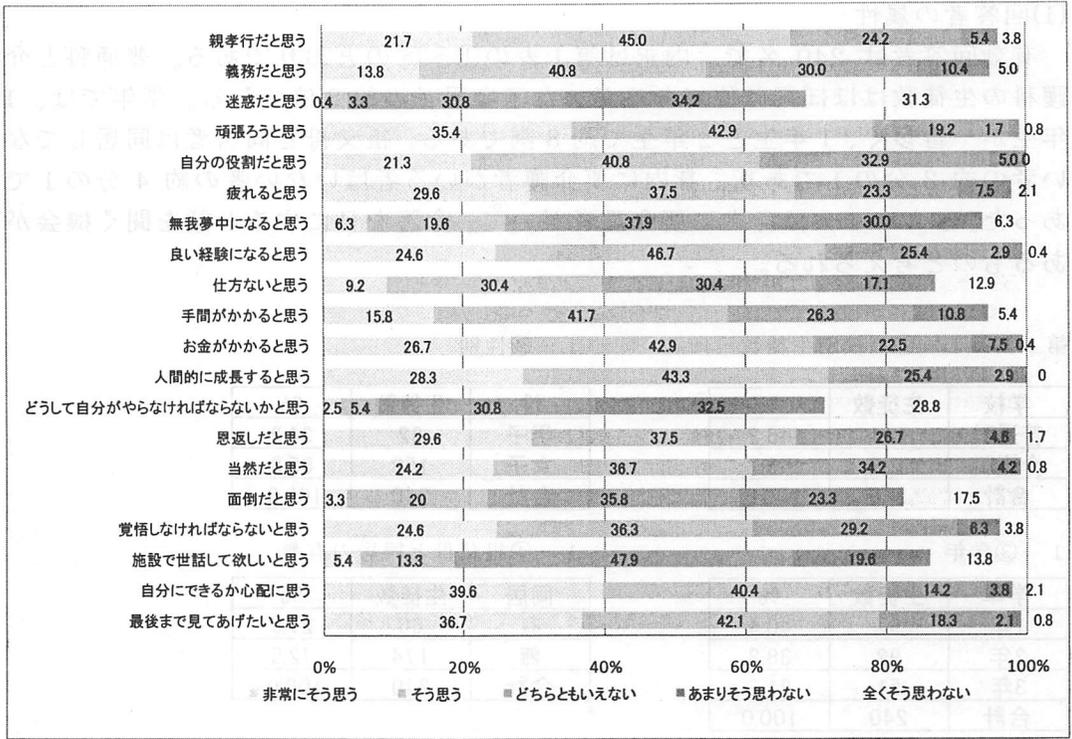
高校	要介護有	要介護無	合計
普通科	14	97	111
(%)	12.6	87.4	100.0
介護科	32	97	129
(%)	24.8	75.2	100.0
合計	46	194	240
(%)	19.2	80.8	100.0

高校別に身内に要介護者がいるかの有無を比較すると、1-⑥のように介護科は普通科の約 2 倍であった。普通科の高校生は約 8 人に 1 人であるが、介護科の高校生は 4 人に 1 人が身内に要介護者がいることになる。身内に要介護者がいることで介護科に進学したのか今回の調査では分からない。

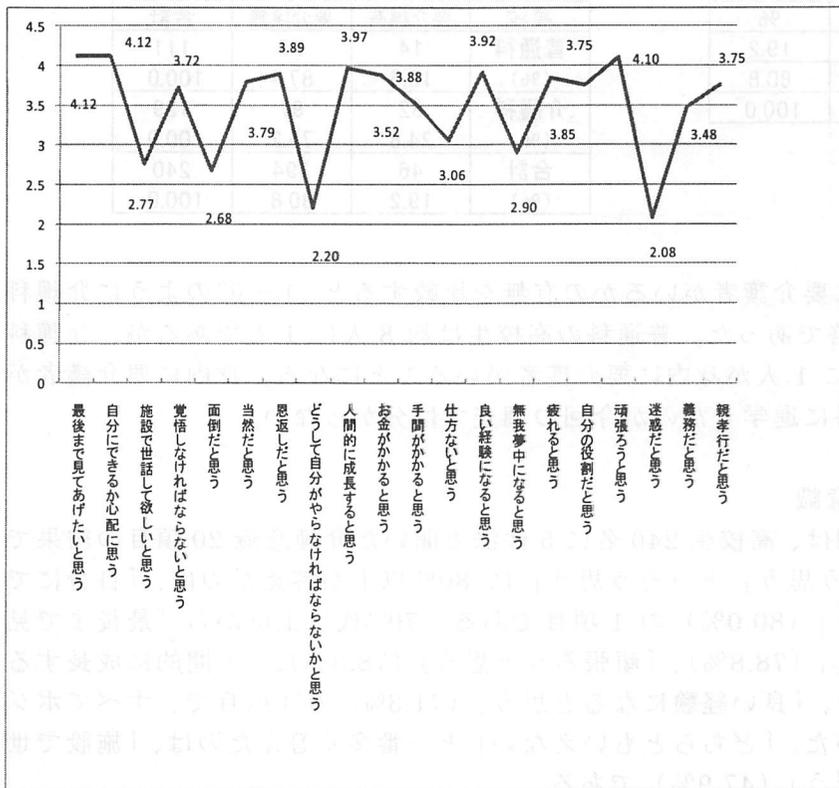
(2) 高校生の介護意識

第 1 図、第 2 図は、高校生 240 名に 5 件法で聞いた介護意識 20 項目の結果である。「非常にそう思う」と「そう思う」に 80% 以上が答えたのは、「自分のできるか心配に思う」(80.0%) の 1 項目である。70% 代は上位から「最後まで見てあげたいと思う」(78.8%)、「頑張ろうと思う」(78.3%)、「人間的に成長すると思う」(71.6%)、「良い経験になると思う」(71.3%) の 4 項目で、すべてポジティブ項目であった。「どちらともいえない」と一番多く答えたのは、「施設で世話して欲しいと思う」(47.9%) である。

第1図 高校生の介護意識 (n = 240)



第2図 介護意識の平均値



質問に対する5件法の平均値をみると、高得点の上位3項目は、「自分にできるか心配に思う」(4.12)、「最後まで見てあげたいと思う」(4.12)、「頑張ろうと思う」(4.10)である。得点が低いものは、「迷惑だと思う」(2.08)、「どうして自分がやらなければならないかと思う」(2.20)、「面倒だと思う」(2.68)である。平均値の高い項目はポジティブ項目で、低い項目はネガティブ項目であり、本調査においては、高校生は「介護」にポジティブ意識の者が多い傾向にあった。

今回、7割代の者が「思う」と答えた4項目は、「介護」に対してポジティブ意識であり、青森県の調査と同様の結果であった。また、11年前に発表された大前⁹⁾による高校生の調査でも、同様に家族の介護をしようと思っているのが73.6%と発表されており、それらから、高校生時期には約7割の者は親の介護を行おうと肯定的に思っている傾向があるといえる。しかし、8割の者が「自分にできるか心配に思う」と答えており、7割近くの者が「疲れると思う」(67.1%)「お金がかかると思う」(69.6%)と答えており、知識不足の不安や疲労や経済的側面の不安を心配する者も多くいる。

本調査で調査項目を参考にした20歳以上の一般生活者調査⁹⁾では、若年層にネガティブな意識が特に強かったと報告しているが、高校生では、両親はまだ若く、親の介護を現実的に想像できないだろうし、現在、日常生活を支え、いざという時に力になってくれる親に対してネガティブに考えられないのだろう。

(3)高校別介護意識

介護意識20項目を5件法で計算し、高校別に平均値をT検定すると、第2表のように「親孝行だと思う」、「義務だと思う」、「迷惑だと思う」、「良い経験になると思う」、「仕方がないと思う」、「手間がかかると思う」、「人間的に成長すると思う」、「面倒だと思う」、「自分にできるか心配に思う」の9項目に有意差が認められた。

第2表 高校別介護意識で有意差の認められた項目

意識	高校	N	平均値	標準偏差	t値	有意確立
親孝行だと思う	普通校	111	3.89	0.824	2.037	0.043 *
	介護職養成校	129	3.64	1.082		
義務だと思う	普通校	111	3.66	0.91	2.547	0.011 *
	介護職養成校	129	3.33	1.084		
迷惑だと思う	普通校	111	2.27	0.852	3.220	0.001 **
	介護職養成校	129	1.91	0.888		
良い経験になると思う	普通校	111	3.72	0.765	-3.656	0.000 ***
	介護職養成校	129	4.09	0.805		
仕方がないと思う	普通校	111	3.33	0.994	3.465	0.001 **
	介護職養成校	129	2.82	1.253		
手間がかかると思う	普通校	111	3.81	0.792	4.140	0.000 ***
	介護職養成校	129	3.26	1.183		
人間的に成長すると思う	普通校	111	3.85	0.777	-2.218	0.028 *
	介護職養成校	129	4.08	0.825		
面倒だと思う	普通校	111	2.90	1.035	2.935	0.004 **
	介護職養成校	129	2.50	1.091		
自分にできるか心配に思う	普通校	111	4.31	0.796	2.978	0.003 **
	介護職養成校	129	3.95	1.045		

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

介護科の高校生が多く思う項目は、「良い経験になると思う」「人間的に成長すると思う」のポジティブ意識の2項目で、その他は普通科の高校生が多かった。

5件法による高校別平均値の比較で、0.5以上の差があったのはネガティブ意識の2項目で、「手間がかかると思う」が0.55、「仕方ないと思う」が0.51であり、どちらも普通科の高校生の方が高かった。

介護科の高校生は、介護に対してポジティブな意識があるので介護科に進学したのか、介護を学ぶ過程において意識に変化があったのかはわからないが、普通科の高校生の介護意識とは大きな差が認められた。また、第1表の⑥のように、身内に要介護者がいるものが普通科より介護科のほうが約2倍多く、その者たちは実際に家庭で介護を見たり手伝ったりする機会もあると考えられる。介護を身近に見たり体験することが介護について深く考えるきっかけとなり、「介護」を職業として考えるようになるのかもしれない。

一時のマスメディアによる介護に対するネガティブキャンペーンの影響は大きく、最近、介護職を目指す生徒が激減した¹⁰⁾。介護の学習や体験のない高校生の進学意識や介護意識にも影響がなかったとは言えないだろう。

堺市社会福祉協議会と老人福祉施設部会では介護に対するネガティブなイメージを払拭するために、高校生向けに映像と福祉の現場職員が高校に赴いての講演を行っている¹¹⁾。

「今まで高校生の持つ情報は、メディアからの情報が中心だったものが、講義を聞き終わると『福祉のことがよくわかってよかった』『人を援助するということは生きがいになるものだと思った』などの感想のように、生徒の考え方が大きく変わることがわかり、このようなアプローチは生徒にとって有意義なものであり、今後このような取り組みが広がれば社会も変わって聞くのではないかと報告している。この取り組み結果からも、介護の正しい情報を提供し、高校生自身が介護を考える機会を設ける事が介護意識の変化につながるものと考えられる。

高校で養成できる介護職の資格はいくつかあり、B高校では、第3表のように、養成時間が130時間の2級訪問介護員（ホームヘルパー）と、1800時間の介護福祉士国家試験受験資格取得の他、600時間の介護職員基礎研修の3コースを設けている。卒業時に介護の資格を取得した者の進路は、そのまま福祉施設に就職する者の他、看護や保育、福祉などの大学や専門学校に進む者が約半数いるというが、普通高校では学ぶことのできない高齢者や障害者など社会的に弱い立場の人と関わる体験は、介護意識に大きく関係すると考える。

今後、誰にも訪れる「介護問題」に対して、知識がないためにネガティブに考えるのではなく、当たり前のこととして受け入れ、対応できる知識を身に付けるためには介護学習の機会を設ける事が必要と考える。それは、B高校のように介護職になるための専門学習でなくても、堺市社会福祉協議会と老人福祉施設部会が行ったような内容で、介護を調理や裁縫と同じように生活技術ととらえ、第4表のように、家庭科や総合学習の時間で学べる程度のものでよいと考える。指導担当は、先の事例のように現場をよく知る現場担当者などが適当と考える。学ぶ時期は、中学がよいか、高校か、大学かは今後の検討課題である。

第3表 B高校介護科の介護職に関する資格取得のためのカリキュラム

1. 介護福祉士受験資格（国家資格）
2. 訪問介護員（ホームヘルパー）養成2級課程修了
専門科目（単位数）

科目名	1年	2年	3年
社会福祉基礎	2	2	
介護福祉基礎	3	2	
コミュニケーション技術			2
生活支援技術	3	3	3
介護過程		2	2
介護総合実習	1	1	1
介護実習	3	5	5
こころとからだの理解	3	3	2
介護員養成2級課程	3		

外部実習

1年：19日（訪問介護、通所介護、短期入所施設 他）

2年：34日（障害者施設、特別養護老人施設 他）

3年：30日（グループホーム、ケアハウス、介護老人保健施設 他）

※ B高校ホームページ参照

第4表 高校生に対する介護学習の例

1	高齢者のからだところ	45分
2	介護支援技術	45分
3	施設見学事前事後指導	45分
4	施設職員講話	45分
5	福祉施設見学	45分

(4)性差による介護意識

介護意識を性別でみると、第5表のように、男子は女子より手間がかかり面倒で迷惑がかかるとネガティブに考える傾向があり、女子は男子より頑張っで最後まで介護したいとポジティブに考える傾向があった。現在の高校生は男女共習で家庭科を学んでいるが、社会には、男性・女性に対する役割期待が存在するとこ

第5表 性別と介護意識で有意差が認められた項目

意識	性別	N	平均値	標準偏差	t値	有意確立
迷惑だと思う	男子	82	2.32	0.941	3.095	0.002 **
	女子	158	1.95	0.835		
頑張ろうと思う	男子	82	3.95	0.845	-2.085	0.038 *
	女子	158	4.18	0.805		
手間がかかると思う	男子	82	3.71	1.071	2.030	0.043 *
	女子	158	3.42	1.036		
面倒だと思う	男子	82	2.93	1.120	2.539	0.012 *
	女子	158	2.56	1.044		
最後まで介護したいと思う	男子	82	3.94	0.837	-2.397	0.017 *
	女子	158	4.21	0.822		

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

るもあり、それが今回の調査結果に関係したのかと思えた。しかし、男の人も女の人と同じように、家事や育児や介護をするのは当然と考える高校生が 77.8% (男子 81.7%、女子 73.9%) であったとする青森県での最近の調査結果もある。青少年が、家事や育児、介護の現実をどの程度理解できているかは分からないが、今後も、このような役割意識の調査に注目したい。

(5) 祖父母と同居及び身近に要介護のいる者の介護意識

祖父母と同居している者と同居していない者の比較では、有意差の認められた項目はなかった。祖父母との同居が介護意識に影響しないのだろう。これは、高校生と同居している祖父母は比較的年齢的に若く、元気高齢者が多く、介護と結びつかないからかもしれない。

第 6 表 要介護者が身近にいないかの有無と介護意識で有意差が認められた項目

意識	要介護者が身近にいるか	N	平均値	標準偏差	t値	有意確立
疲れると思う	いる	46	4.15	0.965	2.302	0.022 *
	いない	194	3.78	0.996		
お金がかかると思う	いる	46	4.17	0.797	2.485	0.014 *
	いない	194	3.81	0.916		
当然だと思う	いる	46	4.09	0.839	2.543	0.012 *
	いない	194	3.72	0.884		

*:p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

身近に要介護者がいるかの有無では、第 6 表のように、いる者の方がお金がかかり疲れると思う者が多かった。介護者の状況を身近に見て思うのだろう。しかし、同時に介護するのは当然と考える者が多い。身近に介護の現状を見て、当然と考えられることは、高齢期を理解していると考ええる。介護体験がポジティブな意識に関係している。

3. おわりに

本稿では、一般高校生と介護を学んでいる高校生の介護意識を比較し、その特徴を明らかにした。各 1 校での意識調査であるが、介護を学び、又は身近に要介護者がいて介護を知っている者とそうでない者との意識に大きな違いがあると示唆された。マスメディア等によるネガティブ情報だけの者との違いが現れたのだと考える。

今回、自由記述の分析まで行えなかった。次の機会に自由記述部分を分析し、また、実施予定の高校生に対する介護体験学習の取り組み結果を報告したい。

謝辞：本調査にご理解、ご協力いただきました小出先生、榎本先生、また多くの高校生の皆様に心から御礼申し上げます。

なお、本研究は、日本生涯教育学会第 30 回大会で発表を行いました。

注記・引用文献

1) 国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来推計人口』：<http://www.ipss.go.jp/>、2010

年 3 月 10 日参照

- 2) 独立行政法人福祉医療機構『要介護（要支援）認定者数』：<http://www.wam.go.jp/>、2010 年 3 月 10 日参照
- 3) 介護職員基礎研修テキスト作成委員会『社会福祉制度とサービス』長寿社会開発センター、2007、pp.45-47
- 4) 内閣府国民生活局総務課調査室「平成 20 年度国民生活選好度調査結果の概要」内閣府国民生活局総務課、2009、pp.1-5 全国に居住する 15 歳以上 75 歳未満の男女 6000 人対象。有効回答は 4480 人(74.7%)、年齢別では 10 代が 223 人 (5.0%)。
- 5) 青森県「青少年の意識に関する調査報告書」2009 年 3 月、p.81、対象は小中高生 1258 人
- 6) 国立情報学研究所「GeNii 学術コンテンツポータル」：<http://ge.nii.ac.jp/>、2010 年 3 月 10 日参照
- 7) 佐々木恵他「家族の介護に対する意識：平成 18 年一般生活者調査から」日本医事新報 No.4382、2008、pp. 70~73
- 8) 大前衛「高校生の福祉や家族介護に関する調査研究(その 1)」(湊川女子短期大学紀要、pp.36-41、1999.)
- 9) 前掲 7)
- 10) 厚生労働省社会・援護局福祉基盤課「介護福祉士指定養成施設（学校種別）平成 21 年度入学定員充足状況」平成 21 年度社団法人日本介護福祉士養成施設協会第 2 回総会資料、2009 年 11 月
- 11) 堺市社会福祉協議会・老人福祉施設部会「本当の介護を伝えることで、高校生の意識を変えていく」『おはよう 21』中央法規、2009 年 4 月号

参考文献

- 1) 加藤聖子「高校生の福祉意識」(『藤女子大学 QOL 研究所紀要 第 2 巻第 1 号』、2007)